



文学からダンス史へ

私は現在、日本・中国・台湾の比較モダンダンス史研究を主としています。誰がどういう動機で誰に習ったのか、いつどこでなぜ踊ったのか、あるいは強制されたのか、そして誰に伝えたかという、人と人がつながった過程に興味があります。

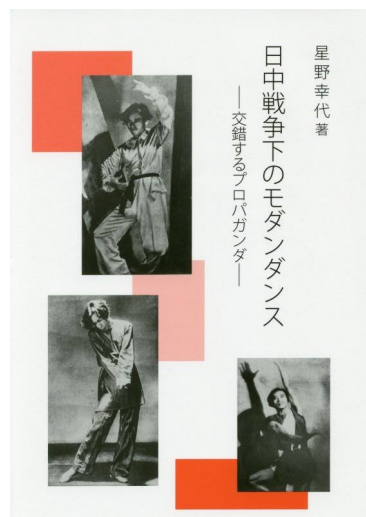
研究のトピックの一つ「皇軍」演芸慰問団」を紹介します。これは、日中戦争／太平洋戦争中に日本軍が占領もしくは戦闘中の中国、シンガポール、ビルマなどに派遣され、日本軍の娯楽のためにバラエティ・ショーを行った臨時のグループです。漫才や落語が一番喜ばれたらしく、吉本興業も「わらわし隊」を組み、これは吉本をモデルにした 2017 年 NHK 朝ドラ「わろてんか」でも描かれました。慰問団には多くのダンサーも参加しました。軍隊慰問ですから戦争協力であり、台湾人・朝鮮人を動員していた事実にも向き合う必要があります。しかし、米英の音楽・バレエは原則禁止、その他の舞踊の発表会も許可制にな



った時代、唯一踊れる場を確保した制度と言えるかもしれません。いま全国に散らばっているダンス・スクールでは、しばしば初期の指導者の方が十代のころ慰問団に参加しています。つまり、現代みなさんが観たり習ったりしているダンスには、戦時中に慰問舞踊団にかかわった人たちが、戦後日本で築いたという面があります。

いま皆さんに、特に〇〇大学で～を学びたい、といった強い思いが無くてもふつうだと思います。ざっくり「こっちかも」と思う方に進むのもあります。私は中国文学、日本史、東洋史、音楽で迷い、中国文学に進学しました。現在ちょうどその四つの交錯することを研究していて、回り道でもなく、必要なルートだったと思っています。

星野 幸代（中国文学）



お宝は「ゴミ箱」に眠る？

分野・専門名：日本語学

日本語の歴史には、まだまだ多くの謎が残されています。例えば、私が研究する副詞という品詞は、これまで歴史的研究の蓄積が少なく、その歴史には多くの謎が残されています。

これまで副詞の歴史が注目されなかったのは、研究対象として敬遠されてきたからと言えます。学校文法では、副詞は「活用しない自立語」で「用言（動詞・形容詞・形容動詞）を修飾する語」と教えられます。ただし、この定義はかなり大雑把で、さまざまな語が副詞

分野・専門紹介-File70



に分類されてしまいます。このことに由来して、副詞には「品詞のゴミ箱」という不名誉なあだ名がつけられています。

しかし、近年は、副詞の歴史的研究が熱を帯びています。その理由は、従来の研究では解明できなかった事実が、副詞の歴史から解明できる可能性があるからです。例えば、古代日本語には、「ぞ・なむ・や・か→連体形、こそ→已然形」という呪文でおなじみの係り結びがあります。これは、特定の助詞が文中にあることで、文末の活用形が変化するという、構文（文をどのように形作るか）に関わる現象です。ある研究者は、係り結びが使われなくなったのは、副詞を使う表現が歴史的に増加したからだと考えています。この仮説が正しければ、副詞は日本語の歴史で重要な役割を担っていたことになります。

今後、副詞の歴史的研究が進められるにつれ、日本語の歴史的事実がさらに解明されていくことでしょう。いつの日か、「ゴミ箱」が「宝の山」と呼ばれる日が来るのかもしれません。(吉本 裕史・博士後期課程2年)

分野・専門紹介-File71

「よく知らないけどインド哲学だけは無いな」と思っている君へ

分野・専門名：インド哲学

インド哲学と名乗ってはいますが、ここで研究できるのは哲学だけではなく、文学、論理学、文法学、などなど、古典インドで文献をもとに研究できるなら研究対象たり得ます。ですが、何を研究するにせよ、インド哲学を研究していく上で避けては通れないものがあります。それはサンスクリットを読めるようになること。何故なら研究対象となる文献は大体サンスクリットで書かれているからです。とはいえ最初は皆文字すら読めないの、一年かけてサンスクリットの基本的な文法を学んだあと、実際にサンスクリット文献を日本語に訳していく授業を通してサンスクリットを読む練習を重ねます。いろいろな分野の文献に触れることで、その分野のことも知ることが出来て一石二鳥です。有名どころでは「色即是空」でお馴染みの『般若心経』とかインド二大叙事詩と称される『マハーバータ』『ラーマヤナ』とかを読みます。

ところで、あなたも一度は「サンスクリットは難しい」という話を聞いたことがあるかもしれません。残念

ですがそれは事実です。文法の講義をしっかり受けても分からなくなる人もいるでしょう。でも心配は要りません。研究室には訊けば親身になって教えてくれる先輩方がいます。自分で考える努力を怠らない限り、先生方も助けてくれます。そして、難しいという評価が少々誇張気味になっているのも事実です。例えば、確かに名詞の活用語尾は無数にありますが、その全てを覚えなければならないわけではありません。

これを読んで、インド哲学に興味を持つとまではいかなくても、専攻配属の選択肢の中にインド哲学を残しておいてくれる人が一人でもいたとしたら、筆者としては嬉しい限りです。(野崎 瑠花・学部4年)



最近の文学部

コロナ禍を転じて…

インターネットの会議ツールを使って開催される学会が増え、他都市に旅行せずに参加できる機会が広がりました。録画がアーカイブされ、時間をずらして見られる工夫も。名大文学部・人文学研究科の教員もオンラインで海外研究者を交えたセミナーやシンポジウムを行なっています。(CN)